

平成28年度は、経営形態を地方公営企業法の一部適用から全部適用へ移行して4年目の決算となります。まず、収入では、常勤内科医師の休職に伴い外来患者数が減少し、その影響を受け外来収益は減少しています。しかし、3階病棟においては、当年度より一般病棟のうち10床を在宅復帰を目的とした「地域包括ケア病床」へ移行したことにより、診療報酬単価が増加となり、それに比例して入院収益は前年度より増加しました。次に、支出では、地方公営企業法の全部適用に伴う職員の病院独自採用移行期間と重なり、医業収益に占める職員給与の比率を示す職員給与比率は増加していました。が、人事などの見直しにより本年度は71・2%（前年度78・2%）まで減少しています。これらの結果、平成28年度の決算は、収入が9億2,476万円、支出が9億3,999万円となり、1,523万円の赤字決算となりました。

平成28年度の入院患者数はのべ23,823人で、前年度と比較し、186人の増加となり、病床利用率は71・7%となりました。外来患者数はのべ24,144人で、前年度と比較し2,228人の減少となりました。また、夜間・休日等の救急患者の受入は1,897人（前年度1,744人）であり、うち救急車搬送人数は213人（前年度183人）でした。なお、健康管理センターでの健診受診者延数は2,814人（前年度2,720人）、居宅介護支援事業所のケアプラン作成件数は1,841件（前年度1,729件）、訪問看護ステーションの利用者数は456人（前年度433人）、のべ訪問回数は2,202回（前年度2,060回）となっています。平成29年度は、これまでの経営の効率化等に加えて、当年度に策定した「新公立病院改革プラン」に沿った数値目標に向かって、さらなる経営の改革に取り組んでいきます。

■平成27年度との比較	患者数	平成27年度		平成28年度	
		入院	外来	入院	外来
診療単価 (患者1人・1日当たり)	入院	19,525円	6,405円	20,681円	6,554円
病床利用率	入院	66.9%	66.9%	71.7%	71.7%
平均在院日数	入院	20日	20日	20日	20日

■改革プランの実績	項目	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	目標値(平成32年度)
経常収支比率(%)		97.0	102.3	104.7	104.5	98.8	98.7	100.8	97.2	91.6	98.4	100以上
医業収支比率(%)		97.2	101.7	96.1	94.3	87.8	88.6	90.9	86.0	81.3	88.2	90以上
職員給与比率(%)		67.9	65.0	69.0	68.2	71.4	69.4	68.0	73.1	78.2	71.2	69以下
病床利用率(%)		71.2	71.5	71.2	68.3	67.4	64.1	66.9	68.6	66.9	71.7	83以上

注) 目標値は、平成32年度までの「新公立病院改革プラン」に沿った目標値となっております。

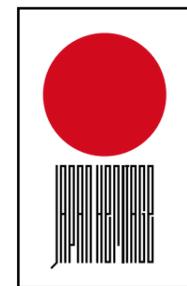
■用語の説明

経常収支比率…経常的な経営活動に伴う収益から費用を差し引いたもの。この数値が100%を超える場合は経常黒字、100%未満であれば、経常赤字を示します。(経常収益/経常費用)×100
医業収支比率…医業費用が医業収益によってどの程度賄われているかを示す指標。経常収支比率と同様にこの比率が100%以上であることが望ましい。(医業収益/医業費用)×100
職員給与比率…病院の職員数などが適切か否かを判断する指標。職員給与費をいかに適切なものとするかが病院経営のポイントとなります。(職員給与費/医業収益)×100
病床利用率…病院の施設が有効に活用されているかどうかを判断する指標。病床利用率が恒常的に低い場合は、病床規模が適切か否かを検討する必要があります。(年延入院患者数/年延病床数)×100

米作り、二千年にわたる大地の記憶

シリーズ日本遺産② 菊池川流域「今昔『水稻』物語」

問い合わせ
三加和公民館
(社会教育課)
0968-34-3047



菊池渓谷 (菊池市)



白石堰 (玉名市・和水平町)



番所の棚田 (山鹿市)

Japan Heritage

二千年にわたる開墾の歴史 (中世〜現代) 詳細ストーリー②
 中世以降、山間では、溜め池造成や水路建設などの農業土木技術の向上によって、菊池川流域でも井手(用水路)が整備され、それまで水が届かなかった高台が水田に変わりました。江戸時代になると測量技術や土木技術が更に向上し、各地に長距離の井手が通されました。全長11kmの「原井手」(菊池市)は、延べ454mものマップ(水路トンネル)を手作業で穿ち、水田を作るのが難しかった山地に棚田を拓き、米作りを可能にしました。「原井手」は300年以上経った今も現役で、地域の棚田を潤しています。番所地区の棚田は、急峻な山の斜面を切り拓き石積みを組み込んだものであるが、集落内の住宅等も石積みの



旧玉名干拓施設 (玉名市)

上に築かれ、漆喰や泥壁等の伝統的な工法で建てられており、棚田をはじめ山里の自然と古い屋並みが調和した農村景観を見ることが出来ます。近世以降、海辺では、築堤や樋門建設の技術が発達し干拓事業が続けられてきました。菊池川河口には広大な干潟があり、堤防を築いて潮止めすることで耕作地を開くことが出来ました。

た。その規模は年を追うごとに大きくなりました。明治時代中頃には高さ3〜6mの石積み長さ5・2kmにも及ぶ、当時国内最大級の「旧玉名干拓施設」の堤防が築かれ、最終的には面積3千haの耕作地が海から誕生しました。「海の万里の長城」とも称されるこの堤防は、城の石垣のような様相で、近くに佇むと見る者を圧倒し、秋の収穫時には金色の稲穂と石積みの堤防群とが美しいコントラストを見せてくれます。近代に入ると菊池川沿いの沼地では、菊池市出身の農業技術者、富田甚平が私財をなげうって収穫期にも水が抜けなかった湿田を乾田に変える暗渠排水技術を開発しました。同時に湿田から抜いた水を水田に活用する技術を開発して日照対策も行いました。